第96回日本感染症学会西日本地方会学術集会

第74回日本化学療法学会西日本支部総会　合同学会

ランチョンセミナー3

院内感染対策での ICPのリーダーシップとは

日 時　**12月19日(土)**　12時20分～13時10分

会 場　**第4会場**

新来島高知重工ホール
（高知県立県民文化ホール）
4階　第7・8多目的室
〒780-0870 高知県高知市本町4丁目3-30

座長　**北原 隆志先生**
山口大学医学部附属病院 薬剤部 教授・薬剤部長

演者　**浜田 幸宏先生**
高知大学医学部附属病院 薬剤部 教授・薬剤部長

学会HPより事前予約をお願いいたします。

予約受付期日　2026年12月1日(火)

※当日の整理券の配布はございません。

共　催
第96回日本感染症学会西日本地方会学術集会
第74回日本化学療法学会西日本支部総会 合同学会/日医工株式会社
学会HP▶https://med-gakkai.jp/kansenkaryo-w2026/

院内感染対策での ICPのリーダーシップとは

高知大学医学部附属病院　薬剤部　教授・薬剤部長
浜田幸宏

薬剤耐性（AMR）の拡大、新興感染症の出現に加え、近年は抗菌薬の供給不安定化が医療現場の大きな課題となっている。このような環境下で、感染制御薬剤師（ICP）には従来以上に高度なリーダーシップが求められている。院内感染対策におけるICPのリーダーシップについて、日米の感染制御体制の特徴を踏まえ、日本型ICPモデルの方向性を考察する。

米国ではCDTMを基盤として、ICPがASTの中心的役割を担い、抗菌薬選択、TDM、処方調整などに主体的に関与している。一方、日本ではPBPMの導入や診療報酬制度を背景に、ICPの役割が拡大している。特にJ-SIPHEを活用したサーベイランスにより、抗菌薬使用量や耐性菌発生状況の可視化が進み、地域を含めた感染対策への参画が可能となった。また、日本のICPは病棟活動や患者面談を通じて多職種と密接に連携し、患者中心の感染制御を実践している。さらに近年は抗菌薬の供給不足や出荷調整への対応も重要な役割となっており、代替薬の提案、使用優先順位の設定、院内周知を通じて限られた医療資源を適切に管理することが求められている。

日本のICPには、抗微生物薬適正使用支援、感染症サーベイランス、多職種連携に加え、抗菌薬供給問題への対応を含めた感染対策の司令塔としての役割が期待される。今後はPBPMの推進と職種間協働を通じて、日本型ICPモデルを発展させ、持続可能で質の高い感染制御体制を構築していくことが重要である。

